新・農業経営者ルポ／第88回

素直にやって結果を出す 元ヤンキーの一直線農業



「銀座で飲めるような農業をやりたい」。これを口癖に福島県いわき市の和田正人君（44歳）は、就農して５年というのに直播と米麦２毛作へ果敢に挑戦する。規模を拡大しても機械や施設が過剰投資になるのを戒め、ひたすら「田んぼの回転率」を追い求めていく。この農業経営スタイルは、就農前のさまざまな職業遍歴から得た結論である。大震災、大津波、原発事故のトリプル・パンチに挫けることなく、生来のヤンキー気質のチャレンジ精神を発揮して乗り切ろうとするその姿に、新しい農業経営者の誕生をみた。　　取材・文・写真／土門剛

素直にやって結果を出す 元ヤンキーの一直線農業

この人もまた元ヤンキーである。

福島県いわき市で大規模水稲に挑戦する和田正人君を紹介するのに、こんなイントロで書き始めたのは、その風貌からである。筆者などは、「連れて歩きたいボディーガードNo1」と思っているぐらいに存在感は抜群にある。

元ヤンキーと紹介されるのを、ご本人が大いに迷惑がっていることは先刻承知。でも農業界は、ヤンキー系、番長系、ツッパリ系が幅をきかせてくるようになってきた。そのきっかけを作ってくれたのが、自ら「元暴走族」とカミングアウトして、カリスマ農業者になった和郷園の木内博一君である。

和田君は元ヤンキー系だけに、人との付き合いは実に折り目正しい。素直な性格で、しかも進取の気性に富んでいる。こうした和田君の人となりから彼の農業経営を探訪してみたい。

トラクタに乗ったことがなかった

和田君は福島県いわき市四倉町で、1967年生まれの44歳。まだ就農して5年目だ。

「親父が残してくれたのは、1haの田んぼと、6ha程度の借り地でした。親父が脳梗塞で倒れたときは、地元で働いていました。しばらくは農作業の大半を母親に任せるようなことになりましたが、田んぼで格闘する母親の姿を見て、仕事を辞めて農業を継ぐことにしたのです。継ぐ前は、コンバインと田植え機しか乗ったことがなかった。何でだか知らないけど、親父はトラクタに乗ることだけは許してくれなかったんです。技術もなにもないところから農業をスタートしました」

いまは25haまで経営面積が増えた。わずか5年で3倍以上の増え方だ。別段、力んでの増やしたわけではないと、本人はこう説明する。

「農地を集めるのにビラをまいたりするようなことはしていません。両親が集積してくれたものがベースになって増えたものです。いまも両親の努力に感謝しています」

就農前には、土建、運送、保険、工場、ホテル、飲食と、製造業からサービス業まで多種多彩な職業を遍歴してきた。学校を出てから30歳代後半の就農までの間、ひとつの仕事で3年ちょっとの経験になろうか。これは決して飽きっぽいというわけではない。若者特有の「何でも見てやろう」精神に溢れていただけのことだと思う。

その職業遍歴の中で印象に残るエピソードは何かと聞いてみたことがある。30歳前に経験した長距離トラックの運転手だという。福島から関西方面へ雑貨を運んでいて、大阪南港フェリー埠頭のトラック・ターミナルで仮眠していたときに阪神・淡路大震災（95年）に遭遇する。

「あれは直下型の地震でしたから、大きく突き上げるような揺れが1分ほど続いたでしょうか。トラック・ターミナルの仮眠室のベッドに横たわっていましたが、思わずベッドの枠にしがみつきました。それから福島に戻るのが一苦労。当時は、いまほどにカーナビも発達していないし、ネット情報をキャッチできるスマートフォンのようなものもありませんでした。東名高速道路も、中央高速道路も、通行止めになると思い、北陸自動車道に迂回することにしたのです、急がば回れですかね」

阪神淡路大震災から16年目、今度は東北関東大震災に遭遇する。行動派の和田君らしい希有な経験だ。

「銀座で飲めるような農業をやりたい」

3月11日午後2時46分、このとき、和田君は東京・千代田区麹町の全国農業会議所のビルにいた。稲作経営者会議の青年部役員会が予定されていた午後1時に間に合わすべく、午前に次男の卒業式への列席をすませ



和田農場　代表

和田正人　福島県いわき市

わだ・まさと●1967年福島県いわき市生まれ。高校卒業後、土建、運送、保険、工場、ホテル、飲食など多種多様な職種を遍歴し、39歳に就農。脳梗塞で倒れた父の後を継ぎ、専業農家に。現在、経営面積は25ha（食用米、餅米、小麦、小豆）。小豆と麦はコメとの二毛作。就農してすぐから、直播栽培にも取り組む。母、妻は自家製の原料を使った大福餅、お萩、おにぎりなどの加工を担当。地元５カ所の直売所に出荷。稲作経営者会議に所属。東日本大震災以前、阪神淡路大震災（95年）、宮城県沖地震（78年）を経験。モットーは「日本で誰にも負けないファミリー農業」。

て車で駆けつけたが、90分遅れて会議所に到着した。大地震は、席について10分後のことだった。

もう会議どころではなくなった。役員会に参加していたのは約10人。東北からは、和田君のほか、宮城県栗原市の生産者もいた。ここは最大震度7を記録した地域だ。めいめいが自宅に連絡をとるが、地震発生で通信障害が起きていて携帯電話は通じない。とっさに会議所の加入電話を借りて連絡を試みたが、連絡をとることができたのは90分後のこと。

「そりゃ、心配しましたよ。東京でも半端じゃない揺れでしたから。しかも震源地は三陸沖ということでしょう。福島県に近いじゃないですか。小学生のときに、宮城県沖地震（78年）も経験しているので、とっさに津波のことが心配になりました。ようやく連絡がとれて、家族5人は全員無事で住宅も倉庫もほとんど被害がなかったと聞いて、全身の力が抜けるぐらい安心しました」

帰心矢のごとしの心境に陥ったが、交通大混乱で帰るに帰れない。常磐自動車道や東北自動車道は通行止め。国道6号線も大渋滞。電車も、常磐線と東北新幹線が運行をやめてしまった。その夜は行動を起こさないことに決めた。和田君らしいのが、その後の行動である。ホテルに戻ってすぐに銀座へ出かけることにした。あの大地震の夜に銀座へ繰り出すのは、たいした度胸の持ち主だと誰しも思われるであろう。本人の弁明を聞きそびれてしまったが、日頃の口癖を紹介してみたい。

「銀座で飲めるような農業をやりたい」

日頃から、儲かる農業をやりたいというのが、和田君の目標で、それをそんなセリフで表現しているのである。ただ和田君に成り代わって弁明をしておきたいのが、銀座は銀座でもいまのところ通うのは農業経営者がポケット・マネーでもいける大衆価格の店らしい。

この目で見た故郷の惨状

その翌朝、関越自動車道を利用して新潟経由で地元・いわき市へ戻った和田君は、故郷の悲惨な状況を目の当たりにして言葉を失う。

「会津若松から猪苗代に入った頃に、故郷の地震の被害の大きさを実感しました。道路は陥没や地割れが目立っていました。福島市郊外では団地が倒れているのも目にしました。裏道を使い、ようやく自宅にたどり着くことができたのは夜8時。翌日は、消防団の救援活動に参加すべく四倉漁港に向かいました。恐怖を覚えるぐらいの惨状でした」

和田君の住むいわき市四倉町は、福島第一原発から直線で32㎞しか離れていない。自宅のある場所は海から4㎞ほど離れている。しかも小山の脇にあった。ちょっと小高くなっているところだ。太平洋へ流れ込む横川の支流が近くにあるが、ここまで津波はやってこなかった。農地は無事だった。

今回の取材で7月に和田君の家を訪れた。想像以上に田んぼの条件は恵まれていた。作業条件の悪い田んぼもあるが、多くは、小山の際にある平坦地に集中していた。水回りなど条件に恵まれている。新参者の和田君は、条件の悪い山間地の農地だけを集めて苦労しているのではないかという思いは、杞憂だった。

「自作地が増やせた理由ですか？午前2時、3時には常に田んぼに出てきたからです。集落の長老たちからみれば、田んぼを守る仁王像に見えているかも知れません（笑）。その様子を黙ってみていた人が、年で農業を止めるときに貸したいといってきてくれた。ありがたいことです」

直播と米麦二毛作へ果敢なる挑戦

就農してまだ5年目の和田君は、コメ作りの回数にして5回の経験し





1いわき市も海岸に近い地域は地震と津波の被害を大きく受けた。直売施設「四倉道の駅」は半年経っても電柱は倒れたままだった。2「普段は散らかってますよ」と謙遜するが、取材した日は農機具庫前はきれいに整頓してあった。

素直にやって結果を出す 元ヤンキーの一直線農業

かない。コメの販売比率は、業者向け7割、直販売が3割だ。周辺には技術的にも和田君をしのぐ生産者はいる。そのことは本人もよく承知している。それが謙遜する態度に出てくるのであろう。

「俺なんか、まだ雑誌に取り上げられるような立派な人間ではありません。技術も、販売も、まだまだ勉強が必要です」

自称「恥ずかしがり」の彼に経営についての話をさせるのには一苦労した。

和田君は大化けする可能性が大きいと見ている。何よりも感心するのが、明確な目標設定と、それを達成するためのスピード感だ。そのためのチャレンジ精神を忘れない。そのひとつが、いきなりの直播への挑戦だ。長く農業者取材を続けているが、就農してすぐに直播に挑戦したような話はあまり聞いたことがない。

「わからないことだらけだから、先輩に教えを乞うんです。直播がいいって言われれば、やる。素直にやってみると結果が出てくる。技術にこだわりがないので、できることなんでしょうね。周囲で誰もやっていなかったこともやってみようと思った理由です」

若くして就農していれば、試行錯誤も重ねることができる。でも40歳を目前にしてのスタートは、時間との勝負という切実な問題もある。これを解決するには、一直線で勝負するしかない。面積を増やすには省力化の技術を習得することが先決と、直感で判断したらしい。

2年前からコメと麦の二毛作への挑戦も続けている。農地面積の制約を超えて収入を増やすために取り組むことにした。これは直播と連動したものと考えている。

「表作のコメの収穫を11月初旬までにすませます。同中旬頃までに裏作となる麦の播種作業に入ります。収穫は翌年6月中旬頃です。そこから1週間は、収穫、代掻き、稲の播種と3つの作業に集中的に取り組む『戦闘モード』に突入してしまうのです。その1週間は、死にものぐるいで仕事に取り組みます。夜はトラクタで仮泊することもあります」

実は、食糧増産が叫ばれた60年代まではいわき市でも米麦二毛作はごく当たり前のことだった。その頃はまだ専業農家の時代で農家は真剣に増産に取り組んでいた。福島県稲作経営者会議の先輩が教えてくれた話だ。兼業スタイルの稲作スタイルが定着するにつれ、稲作単作に移っていく。米麦二毛作に挑戦した和田君の動機をぜひ紹介しておきたい。

「農業でもそうですが、機械や施設や建物を設える装置型の商売は、稼働率がポイントだと思います。トラック会社だって、利益を上げるにはトラックや荷役施設の稼働率を向上させることがイロハのイ。それを運送会社勤めで会得したのです。米麦なら使う機会も同じで余分な機械投資もしなくてすむ。限られた農地条件で利益を上げていくのは、これが最短コースだなと思いました」

横並び意識の強い農家は、自分が突出するようなことを嫌がるが、和田君にはそうしたところがない。肥料・農薬はすべて商系で仕入れている。2、3割は安い。同じものを高く買う理由はどこにもない。

「コメの相場は低い方がいいですね。いまなら1万2000円ぐらいでいい塩梅。2万円は絶対ダメ。誰も辞めないから、みんなダメになってしまう。1万割ってもそこそこ食える人は残るでしょう。9000円で安定収入！って言えるぐらいじゃないと、世界と戦えない時代なんじゃないかと思っています」

「補助金に縁がなくて」

トラクタは3台。田んぼに使う85馬力と75馬力、ハウス作業用の20馬力。コンバインは6条刈1台。田植機は8条植2台。乾燥機は、処理能


3


4

3いわき市は福島・浜通りでも平坦地に恵まれていて「浜通りの穀倉地帯」と思える田んぼの風景が続く。4取り組んで3年目でようやく軌道に乗ってきた直播だが、まだまだ技術面では勉強するところは多いと反省する。

力50石タイプが4台。これで25haの作業を一人でこなす。息子は3人おり、長男は来春高校を卒業する。戦力になるのは早くて数年後だ。

機械類はわずか5年で備えた。自己資金で揃えることが多く、そのおかげで機械や施設への過剰投資をしなくてすんだようだ。

どれだけ補助金を利用したか、聞いてみたことがある。

「補助金は欲しかったですよ。応募しましたが外れることが多くて、結局、自己資金で購入するしかなかったのです。戸別所得補償制度には加入していますから、そっちの補助金はきちんともらっています」

通常、農家ひとりがこなせる面積は、稲作の場合、秋田・大潟村のように1・2ha区画の農地条件でも15ha程度が上限とされている。和田君は、それを10ha上回る。この規模で農作業をこなすには栽培技術以前に段取りが勝負ポイントになる。

最近は、微生物を利用することに関心を持ち始めた。知人から、微生物は究極の省力化につながると聞いたからだ。岩手で微生物を使って親子で60ha規模に挑戦するKさんのもとへも通ったのも、教えを乞うためだ。新しいものなら何でも素直に吸収するところに和田君の真骨頂がある。

農業のよさを本当の意味で実感できたのは実は、5年前にニュージーランド視察に出向いたときだ。訪問前、農業を本気でやろうと決心していた。けれども周りからは、「大変ですね」「若いのに奇特のことで」といった反応しかなかった。予想できた反応だが、見下されているように感じたらしい。だが、帰国後には、気持ちが変わった。出会った農家達の多くは、家族がひとつになって農場を形作っている。それを代々受け継いでいることにプライドを持っていた。それが格好よく見えて、「よし、俺も」という心境になったという。

「自分の心の持ち方ひとつで、日本でも誰にも負けない家族農業ができるんじゃないかと確信したわけです。人がどう思うかじゃない、自分がどこまでできるか勝負してみるしかないと思ったのです」

「放射能は、地元の人間がよく知っている」

原発事故直後に、筆者は和田君に福島からの離脱を勧めたことがある。いわき市でも線量が高い数値を示しているのを知ったからだ。地元を離れても営農が継続できるような話も紹介したが、和田君は乗ってこなかった。

「放射能がどんなものかは、地元にいる人間なら、そのリスクもよく分かっています。お話はありがたいですが、この地で農業を続けてやっていきたいと考えています。みんなが故郷を離れてしまったら、この地域の農業や生活はどうなるかと、とても心配です」

これには返す言葉がなかった。和田君の住む集落は、風向きと地形面で放射能の飛来は少ないというラッキーな面はあったが、当初は、故郷を離れた住民が多かったという。

「これまで、長老たちから、田舎社会はつながりが大事、近所の助け合いだ、互助の精神だとさんざん聞かされてきました。それが大変なときに、防災の要にもなるという。現実に、原発事故が起きてみて、どうなったでしょうか。逃げて行った家族は一言のあいさつもなく、誰がどこに行ったか誰も知らない。上っ面の田舎きどりなんてなんの意味もありません。行動で示すしかありません」

弱気になったときもあった。放射能の風評被害でコメが売れるのか心配した。収穫期に入ってからは、いわき市に限ってみれば、風評は薄らいできた。検査結果の公表で買い手が安心するようになってきたのだ。

「原発事故で、農家の能力が試されています。『安全・安心』から『安全でない・安心でない』へ、ある日を境に異次元の世界に突入してしまった。ただ冷静になれば、『おいしくて安い』ものが売れる価値観は不変のままです。ならば、安全の担保さえできれば、元の世界に戻れる」

取材をしていると、和田君が「あのとき、大変お世話になった方がいる。ぜひともその人のことを取り上げてもらえないか」と頼んできた。滋賀のAさんのことである。

東京から新潟回りでやっと自宅にたどり着いた和田君は、大地震と大津波の被害の大きさを前に、明日からの生活のことを考えた。ガソリンや食料品が不足して日常生活に支障をきたすに違いないと思った。行政に指示を仰いだり、また行政に頼るのではなく、自分の力で可能な限り事態を解決しようと考え、今度は滋賀県へ車を走らせることにした。大地震から4日目の3月15日のことだった。滋賀には、地震が起きる1カ月前に、全国稲経主催の米国旅行で知り合ったAさんがいた。旅行中、ウマが合うところがあり、よく冗談を言い合っていた仲だ。電話で相手の了解を取りつけ、ポケットに20万円を突っ込んで軽トラックで滋賀に向かった。夜8時に家を出た和田君は、国道49号線を新潟に向かい、そこから大雪の北陸自動車道を乗り継いで滋賀に入った。阪神淡路大震災

素直にやって結果を出す 元ヤンキーの一直線農業


7



6


5

5直売施設で売るおにぎりにはコンビニ商品にない手作り感があり、和田農場の人気アイテムだ。6おにぎりの次に開発したのは、大福におはぎで、手作り感に値頃感もあっておにぎりを上回る売れ行きを示すこともある。7地震と津波被害を受けながらも産直施設は修理することなくすぐにオープンして地域の人びとの生活に大きく貢献している。

のときとは逆のコースを走ったのだ。着いたのは翌朝10時。800kmを14時間で走り抜けた。ここでも長距離運転手の経験が役立った。

「現地に着いたら、Aさんはすでにガソリンや食料品を買い揃えておいてくれていました。とんぼ返りができるようにしておいてくれたのです。持参してきた20万円を渡そうとしても、Aさんは受け取ってくれませんでした。それどころか逆に『これ、持って行って』と60万円を差し出してこられました。Aさんの気持ちを地域の人たちにも伝えたいと思い、その全額をいわき市に寄付することにしました。1回しか会っていない方が、なぜこんなに親切にしてくれたのか、いまもそのときに受けた善意を胸にずっとしまい込んであるのです」

農閑期の収入対策

いわき市を訪れたとき、和田君が真っ先に連れて行ってくれたところがあった。四倉漁港近くの直売所「四倉道の駅」だ。津波被害から4カ月以上も過ぎていたのに小舟や流木で壁や窓ガラスは壊れたままだった。その部分には大漁旗で覆っていて、中は営業中だった。お母さんが毎朝作るおにぎり、ご飯パック、大福、おはぎなどがきれいに並んでいた。

直売所の品揃えをみているだけでも売れ行きは順調と思えた。昨年、米価が下がっても売上が上がったのは加工品の賜物だ。ちょっとした追い風も吹き始めていた。いわき市は福島第一原発の事故処理で関係者の前線基地となっている。そこで働く関係者などがおにぎりやご飯パックを買っていってくれるのだ。コンビニの商品とは違う手作り感が人気を集めていると思った。

「ここが製造部」と冗談まじりに連れて行かれたのが、自宅の一部を改造した台所。大きめの炊飯器が3台も並んでいる。食品衛生基準を満たすように部屋の出入り口にはアルコール消毒液もきちんと置かれていた。農閑期の収入対策として始めたものの、加工売上はいまでは和田ファミリーの収入にささやかな貢献をしてくれている。固定客もついたのでお母さんはフル稼働。あの風貌から豪放磊落な面ばかりと思っていたら、小さなことをこつこつと積み重ねる几帳面な性格でもあるようだ。

「新鮮な野菜目当てできた直売所のお客さんの何人かに、ちょっと甘いもんに手を出してもらえれば御の字。それでも1俵数万以上に化けるから、加工は面白い」

最近はやりの6次産業なんて大仰なものではないという。

「本格的な加工場や店舗経営に手を出す気はありません。スーパーは百姓が100年かかっても敵う相手じゃありませんから。うちの必勝パターンは東北で2毛作。加工品の原料の小豆と小麦を回しています。いまは25haですが、うまく作業配分すれば、もう少し増やすことができます。増えた分は、自家加工で使いきる小豆の作付けに回したいと思います。小豆は補助金がでないから誰も作らない。だから作る。どうやって続けられる商売をみつけてやっていくかが大事だと思うんです。隙間の隙間のまた隙間を考える。隙間の条件は、誰もやっていない、大きく儲からない、でも絶対損をしない、の3つ。小麦の生産はいまのところ所得補償をもらうのが目的です。気をつけているのが、これは業者向け、これは直販用、これは補助金という方針をはっきりさせること。ごっちゃになると何をしているのかわからなくなってしまうから。損しているのか、得しているのかわからなくなってしまうのが最悪でしょう」

直播、米麦・小豆二毛作、家内加工。福島県いわき市の和田正人君は、今後、目が離せぬ農業経営者のひとりだ。